

呼吸器疾患の診断と治療 —最近の進歩—

「呼吸器疾患の診断と治療—最近の進歩—」 の特集にあたって

北海道大学大学院
医学研究科呼吸器内科学分野教授

西村 正治

この度、北海道医報生涯教育シリーズXXとして「呼吸器疾患の診断と治療—最近の進歩—」を特集することになりました。下記の19のテーマについて、2012年9月号より順次掲載予定です。

高齢者人口の急速な増大と共に呼吸器疾患を正しく診断し治療することの重要性は増すばかりです。厚生労働省より最近報告された平成23年度人口動態統計によれば、本邦における死因の第一位は悪性新生物であり、全死亡者の3.5人に1人、およそ35万人が悪性新生物で死亡したことになります。このなかで、肺がんは男性の圧倒的第一位であり約5万人、女性でも大腸癌に続いて第2位で約2万人が亡くなっています。また、高齢者における肺炎による死亡数の増加も顕著です。昨年度はついに脳血管障害を追い越して第3位の死因となり、12万人以上の方

が肺炎で亡くなっています。全死亡数に占める肺炎の割合は約9.9%、つまり、10人に1人は肺炎で亡くなるのです。ほかには慢性閉塞性肺疾患(COPD)が全体の9位で16,000人以上が亡くなっており、男性では第7位とこれも近年徐々に死亡数が増え続けている疾患の代表です。このように呼吸器疾患には高齢者の死因として重大なものが含まれますが問題はそれだけではありません。呼吸器疾患の多くが高齢者のQOL低下にも大きな影響を及ぼしているからです。ちなみに慢性呼吸不全のために在宅酸素療法を必要としている患者数は少なく見積もって10数万人はいるとされます。

病気の種類がとて多く、正しい診断をつけることがときに難しいことも呼吸器疾患の特徴です。肺は呼吸を通じて外界と常に接しているため、さまざまな感染症、アレルギー疾患を起し、職業性疾患としても重要です。また、気道・肺胞系と間質の関係、肺動脈と気管支動脈系といったように臓器としての構造が複雑であるために、正しい診断のためには画像診断と機能診断の両者を駆使する必要があります。

このように、社会の高齢者人口が増えて呼吸器疾患の重要性が増しているにも関わらず呼吸器専門医の増加は伸び悩んでいます。循環器や消化器の内科専門医と比べても絶対数が決定的に不足しています。そのため、一般内科医が呼吸器疾患患者を診ることも多いものと推定されます。今回の企画はそのような背景から、必ずしも呼吸器を専門としていない多くの医師のための講座としてお役に立てば幸いです。

北海道医報生涯教育シリーズXX 「呼吸器疾患の診断と治療 —最近の進歩—」 (医報9月号から順次掲載)

項目(案)	執筆者所属		医報掲載予定
1 「呼吸器疾患の診断と治療—最近の進歩—」の特集にあたって	西村 正治	北海道大学大学院医学研究科呼吸器内科学分野教授	9月
2 インフルエンザと上気道炎	澁川紀代子	旭川医科大学病院感染制御部	9月
3 市中肺炎	白鳥 正典	札幌医科大学医療人育成センター准教授	10月
4 高齢者肺炎と誤嚥性肺炎	小場 弘之	札幌手稲溪仁会病院副院長	11月
5 結核・非結核抗酸菌感染症	鎌田 有珠	国立病院機構北海道医療センター呼吸器内科医長	12月
6 気管支喘息	田中 裕士	医大前南4条内科院長	H25年1月
7 慢性閉塞性肺疾患 (COPD)	牧田比呂仁	医療法人社団憲仁会牧田病院院長	H25年2月
8 特発性間質性肺炎	千葉 弘文	札幌医科大学第三内科学講師	H25年3月
9 膠原病に伴う肺病変	渥美 達也	北海道大学大学院医学研究科免疫・代謝内科学分野教授	H23年4月
10 肺癌 診断方法の進歩を中心に	品川 尚文	北海道大学病院内科I助教	H25年5月
11 肺癌 薬物療法を中心に	佐々木高明	旭川医科大学呼吸器センター助教	H25年6月
12 肺癌 放射線療法を中心に	鬼丸 力也	北海道大学病院放射線治療科講師	H25年7月
13 肺癌 外科療法を中心に	加地 苗人	札幌南三条病院副院長／呼吸器外科部長	H25年8月
14 じん肺症と石綿肺アスベスト	木村 清延	北海道中央労災病院院長	H25年9月
15 悪性中皮腫	大泉 聡史	北海道大学病院内科I講師	H25年10月
16 肺血栓塞栓症	小笠 寿之	旭川医科大学循環・呼吸・神経病態内科学講師	H25年11月
17 肺動脈性肺高血圧症	辻野 一三	北海道大学病院内科I講師	H25年12月
18 睡眠時無呼吸症候群	山本 泰司	旭川医科大学呼吸器センター助教	H26年1月
19 在宅酸素療法と在宅人工呼吸	宮本 顕二	北海道大学大学院保健科学研究院機能回復学分野教授	H26年2月